

令和元年5月27日現在

機関番号：32612

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07082

研究課題名(和文)狩谷工キ斎の『論衡』校勘に関する研究

研究課題名(英文)A Study of Kariya Ekisai's annotation on Lunheng

研究代表者

矢島 明希子(YAJIMA, Akiko)

慶應義塾大学・斯道文庫(三田)・助教

研究者番号：20803373

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：宋版『論衡』によって工キ斎が校注した、あるいはその校注を転写したと見られる諸本を調査した結果、工キ斎の自筆校本は静嘉堂文庫蔵和刻本と慶應義塾蔵広漢魏叢書本の二本であり、そのうち和刻本は、工キ斎が校注を書き入れた後に、宋版論衡の旧蔵者である山梨稲川の親族に渡っている。一方、広漢魏叢書本の校注は、京都大学蔵久保謙手校本や東北大学狩野文庫蔵広漢魏叢書本に転写されている。両系統とも、工キ斎と近い関係にあった人物によるものである。調査した諸本のうち、静嘉堂文庫蔵小島抱沖手校本は、工キ斎校注の転写ではなく宋版の原本に拠って校合を行ったと考えられ、工キ斎以降の宋版伝来の一端が知られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は宋版『論衡』を通じて、江戸後期における考証学者の交流関係や漢籍の研究方法、善本の伝来の一例を示した。狩谷工キ斎の漢籍研究の成果は、緻密な校勘の他に、自筆の識語には宋版の旧蔵者や通津草堂本の刊行時期など、書誌学上非常に重要な見識が述べられている点にある。工キ斎の書誌学的な成果は、渋江抽斎等が編纂した『経籍訪古志』にまとめられているが、そこに至る以前の識語が校注転写本にも継承され、現在に伝えられている。宋版の書誌的研究だけでなく、日本書誌学史の観点から見ても工キ斎研究の意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：In order to study Kariya Ekisai's annotations on Lunheng, about 10 books that he annotated about text critique and related on his work was surveyed. In this survey, his autographic annotation was found from two of them. (1) Japanese edition in SeikadoBunko (101-1), (2) Guanghanwei congshu version in Keio University Library (110X・567・100). His annotation on these books were transcribed on others by his fellows or pupils. For example, his annotation on (1) were transcribed on another Japanese edition in Tokyo Metropolitan Library (井723). On the other hand his annotation on (2) were transcribed on another Japanese edition in Kyoto University, The Library of the Graduate School of Letters and Faculty of Letters (C・XIVh・1-6) by Kubo Chikusui and on another Guanghanwei congshu in Tohoku University Library (狩1・282) by Yamada Chintei. These transcriptions show us relationships among intellectuals and how to study Chinese books in late Edo period.

研究分野：書誌学

キーワード：論衡 書誌学 考証学 狩谷工キ斎 漢籍

## 1. 研究開始当初の背景

申請者は、平成 23～28 年度科学研究補助金による基盤研究(A) (研究課題番号：24242009) 「宮内庁書陵部収蔵漢籍の伝来に関する再検討 デジタルアーカイブの構築を目指して」に調査研究員として参加し、宮内庁書陵部蔵宋版『論衡』三十卷(欠巻二十六～三十、500・8)の書誌調査を担当した。書陵部本に附された「宋版論衡十二卷ハ、本狩谷椽齋ノ求古楼蔵書ノ一ニシテ、其後木村正辞ノ所有セルヲ宮内省ガ購入セル者ナリ。此書ノ事委シク椽齋ノ著ハセル経籍訪古志ニ見エタリ(句読点は申請者による。以下同じ)」という紙片から、書陵部本『論衡』は、狩谷椽齋(1775-1835)の手にあったことが知られた。

その後、さらなる追跡調査によって、静嘉堂文庫所蔵の和刻本『論衡』三十卷(寛延三年刊、101・1)にたどり着いた。この静嘉堂蔵和刻本は、狩谷椽齋自筆校本であり、巻二十五の末尾に「以上以駿府稲川氏所蔵一本校讐、其本宋諸帝諱字皆従缺筆、蓋重彫宋槧者、今校曰宋本惜巻廿五至巻出缺失、今校以通津草堂刻本。云湯島狩谷望之記」と記されている。ここに記された「駿府稲川氏所蔵一本」こそ、現在書陵部に所蔵されている宋版『論衡』であり、「駿府稲川氏」は漢詩人の山梨稲川(1771-1826)と思われる。山梨稲川と『論衡』について調査すると、山梨稲川が石上久左衛門に宛てた書簡に「論衡拝借仕度候。貴家へ八津軽屋校合本とさしかへ指上可申候」とある。この「津軽屋校合本」は、静嘉堂文庫所蔵の和刻本を指す可能性が高い(笹野堅編『山梨稲川書簡集』、編者、1936年、60頁)。山梨稲川とは、狩谷椽齋と同時代の漢詩人かつ文字学者であり、狩谷椽齋とは文字学を通じて交流があった(今関天彭『山梨稲川と先輩交遊』、志豆波多会、1934年、13-14頁)。

以上のように、平成 28 年度までの調査によって旧蔵者がある程度判明しているが、宋版『論衡』の伝来についてさらに研究を深めるために、善本を求め、研究してきた江戸時代の考証学者の漢籍研究について検討する必要がある。

## 2. 研究の目的

宋版は、刊本では最古に位置するテキストであり、テキストを校勘する際に最も大きな比重を占めるものといっているだろう。これら宋版は学僧の往来や貿易などにより日本にもたらされ、足利学校や五山の学僧など、当時の知識人階級によって研究された。中には、中国では散逸してしまい、日本にしか伝存しないものも存在する。これらの宋版を含めさまざまな貴重書の調査・研究において、江戸時代後期、民間にあって多くの善本を蒐集し、校勘した狩谷椽齋の功績は大きい。こうした宋版がどのような人物の手に伝わり、どのように研究されたのかを考えるために、宋版『論衡』の伝来および狩谷椽齋の『論衡』校勘について整理し、椽齋の漢籍研究の影響について明らかにする。

## 3. 研究の方法

狩谷椽齋の『論衡』校勘と宋版『論衡』と関係する諸資料について書誌学的な調査を行い、複写あるいは写真撮影によって画像を比較し、資料中に書き入れられた校注や識語について検討した。調査した資料のうち、主なものは以下の 10 件である。

- (1) 狩谷椽齋手校和刻本『論衡』三十卷(寛延三年刊、後印、静嘉堂文庫、101・1)
- (2) 和刻本『論衡』三十卷(寛延三年刊、後印、京都大学文学研究科附属図書館、中哲文、C・XIVh・1-6)
- (3) 和刻本『論衡』(寛文三年刊、後印、都立中央図書館、井上文庫、井 723)
- (4) 狩谷椽齋手校『広漢魏叢書』所収『論衡』三十卷(清刊、慶應義塾大学、110X・567・100)
- (5) 『広漢魏叢書』所収『論衡』三十卷(東北大学附属図書館、狩野文庫、狩 1・282)
- (6) 小島抱沖手校『論衡』三十卷(明刊、静嘉堂文庫、47・11)
- (7) 『論衡校異』一卷(狩谷椽齋校訂抄録、東北大学附属図書館、狩野文庫、狩 1・808)
- (8) 岡本況齋手稿『論衡考』(東北大学附属図書館、狩野文庫、伊 2・258)
- (9) 通津草堂本『論衡』三十卷(明嘉靖刊、通津草堂、静嘉堂文庫、12・1)
- (10) 通津草堂本『論衡』(明嘉靖刊、国立公文書館、子 72・8)

この他、山梨稲川の日記『東寓日歴』(文政九年、自筆、静岡県立中央図書館、K072・14)、木村正辞の日記『木村日記』(明治三十六至四十二年、自筆、岩瀬文庫、143・22)、椽齋の展覧書目『求古楼展覧書目』(明治、森氏写、岩瀬文庫、146・180)、『卿雲輪困附録』(渋江抽齋撰、

書写者不明、岩瀬文庫、101・214)、小島抱沖が編纂した漢籍目録『古卷見聞録』(嘉永四年写、安政二年補訂、大東急記念文庫、51・18・1)など、関係する諸資料について調査を行い、本研究の補助とした。

#### 4. 研究成果

上記の諸本の調査した結果、次のように整理した。

- (1) 論衡三十巻 和大 8冊(静嘉堂文庫 101・1)  
漢王充撰 [明]黄嘉惠閱 [三]浦石陽(衛興)点  
寛延三年(1750)刊(京 山田三郎兵衛等) 後印(京 若山屋喜右衛門)  
狩谷椽齋手校 [戸塚柳齋]旧蔵
- (2) 論衡三十巻 和大 6冊(京都大学文学研究科附属図書館 C・XIVh・1-6)  
漢王充撰 [明]黄嘉惠閱 [三]浦石陽(衛興)点  
寛延三年(1750)刊(京 山田三郎兵衛等) 後印(京 若山屋喜三郎)  
文政五年(1822)久保[筑水](謙)手校
- (3) 論衡三十巻 和大 8冊(都立中央図書館 井723)  
漢王充撰 [明]黄嘉惠閱 [三]浦石陽(衛興)点  
[寛延三年(1750)刊(京 山田三郎兵衛等)] 後印(京 弘簡堂)  
狩谷椽齋校注転写本
- (4) 論衡三十巻 唐大 8冊(慶應義塾図書館 110X・567・100)  
漢王充撰 [明]錢震瀧閱 廣漢魏叢書(明何允中編 [清]刊修)所収  
文政二年(1819)狩谷椽齋手校 多紀元堅・渋沢栄一旧蔵
- (5) 論衡三十巻 唐大 8冊(東北大学附属図書館 狩1・282)  
漢王充撰 廣漢魏叢書(明何允中編 [清]刊修)所収  
江戸末 [山田椿庭]手校 山田椿庭旧蔵
- (6) 論衡三十巻 唐大 9冊(静嘉堂文庫 47・11)  
漢王充撰 明程榮校 [漢魏叢書零本]明[万曆]刊  
天保十五年(1844)[小島抱沖](沂)手校 小島氏旧蔵
- (7) 論衡校異(外題) 和大 1冊(東北大学附属図書館 狩1・808)  
闕名者編 [江戸末明治初]写(闕名者) 狩谷椽齋和刻本論衡校注抄録
- (8) 論衡考(外題) 和大 1冊(東北大学附属図書館 伊2・258)  
岡本[況齋](保孝)撰 文政九年(1826)写(自筆)
- (9) 論衡三十巻 唐大 6冊(静嘉堂文庫 12・1)  
漢王充撰 明嘉靖十四年(1535)刊(呉郡:蘇獻可通津草堂)  
陸氏守先閣旧蔵
- (10) 論衡三十巻 唐大 10冊(国立公文書館 子72・8)  
漢王充撰 [明嘉靖]刊(通津草堂)[修]

これらを検討した結果、椽齋の自筆校本は(1)静嘉堂文庫蔵和刻本と(4)慶應義塾蔵広漢魏叢書本の2本であることが判明した。そのうち(1)和刻本には、宋版の旧蔵者である山梨稲川の娘婿であり、椽齋等考証学者と交流のあった戸塚柳齋の蔵書印(方形陽刻「柳陰齋圖書記」朱印記)が捺されていることから、椽齋が校注を書き入れた後に、山梨稲川の親族の渡ったと考えられる。また、和刻本校注は、稲川の所蔵の宋版に拠ったとする識語とともに(3)に転写されている。(3)の転写が誰の手になるものかは不明だが、第6冊の表紙に「椽齋書入写し」と書かれた書店の帯がかけられていることから、書き入れは旧蔵者である井上哲次郎(1855-1944)以前のもと考えられる。

一方、(4)慶應義塾蔵広漢魏叢書本の校注は、(2)京都大学蔵久保謙手校本や(5)狩野文

庫広漢魏叢書本に転写されている。(2)は久保謙の校注書き入れ本である。久保謙とは、漢学者の久保筑水(1759-1835)と見られる。筑水は姓を久保田とも称し、名を謙あるいは愛といった。筑水と椽斎の接点は、森鷗外『伊沢蘭軒』(上巻、森鷗外全集七、筑摩書房、1996年、216頁)に記されている。それによると、文化十二年二月六日に菅茶山(1748-1827)や大田南畝(1749-1823)らとともに久保が伊沢蘭軒宅に招かれており、そこに椽斎も同席している。(5)は、『論衡』には書き入れの書写者が明記されていないが、『広漢魏叢書』に収録された他書に「業廣」(山田椿庭の名)が明記されていること、山田椿庭の蔵書印があることから、山田椿庭(1808-1881)による書き入れとみられる。山田椿庭は高崎藩医の家系で、伊沢蘭軒(1777-1829)や多紀元堅(1795-1857)等に学んだ。(4)慶應義塾蔵本は「奚暇齋讀本記」の蔵書印があり、椿庭の師である多紀元堅の旧蔵本である。(6)の小島氏も、多紀氏のもとで学んだ医官の家系であり、椿庭とも交流があった。

いずれの系統も、椽斎自身に親しい人物やその門人と近い関係にあった人物によるものである。『論衡』は明版以降、巻一墨害篇の1丁分を脱落した版が普及するが、椽斎校注は完全な宋版と校合したにもかかわらず、脱落分を補完していない。そのため、椽斎校注転写本にも脱落を補完する本はない。上記の諸本のうち、脱落を補完する本は(6)小島抱沖手校本のみであった。抱沖(1829-1857)は父の宝素(1797-1848)とともに、椽斎の古籍整理事業に加わり、『経籍訪古志』の編纂に寄与したことで知られる。(6)には脱落した一丁分の補写が該当箇所には綴じ込まれており、抱沖が椽斎校注を転写したのではなく、宋版の原本に拠ったことがうかがわれる。

これらの調査・研究を通じて、江戸後期の考証学者の漢籍研究方法や、椽斎以降の宋版伝来の一端を知ることができた。宋版の伝来に関しては、文政二年八月以前に稲川から椽斎の手に移ったと考えられる。天保六年に椽斎が亡くなった後は、天保十五年に抱沖が校合に用いており、宋版の所在を確認できるが、嘉永元年以降の(8)岡本況齋『論衡考』の書き入れに拠れば、一時的に行方不明になっている。今後、これらの隙間を埋める資料の発見が待たれる。

なお、椽斎と抱沖は、宋版の他に明代の嘉靖年間に刊行された通津草堂本を校合に用いている。現在、申請者が国内で確認できた通津草堂本は(9)静嘉堂文庫陸氏旧蔵本と(10)国立公文書館本のみである。通津草堂本は、椽斎の書庫である求古楼蔵として『経籍訪古志』にも著録されており、その著録によると、用いたのは後修本であることから、(10)と同系統の本であろう。しかし、(10)にはその痕跡が見られず、椽斎および抱沖が校合に用いた本の行方は知れない。小島抱沖の弟で家を継いだ尚綱の死後は、小島氏の蔵書の多くが売却され散佚した。宋版論衡もそのような状況の中で、一時行方不明になった可能性が考えられよう。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1件)

矢島明希子、狩谷椽斎手校論衡をめぐって—宋版の伝来と校注転写本、斯道文庫論集、査読無、第53輯、2019、pp.199-229

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。